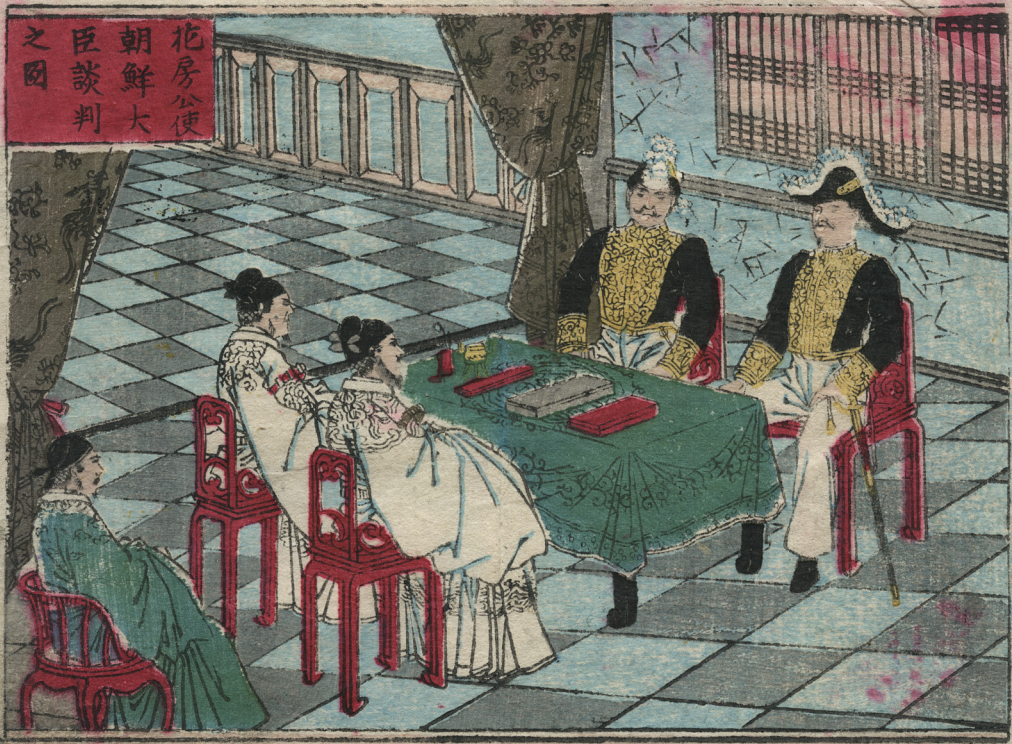
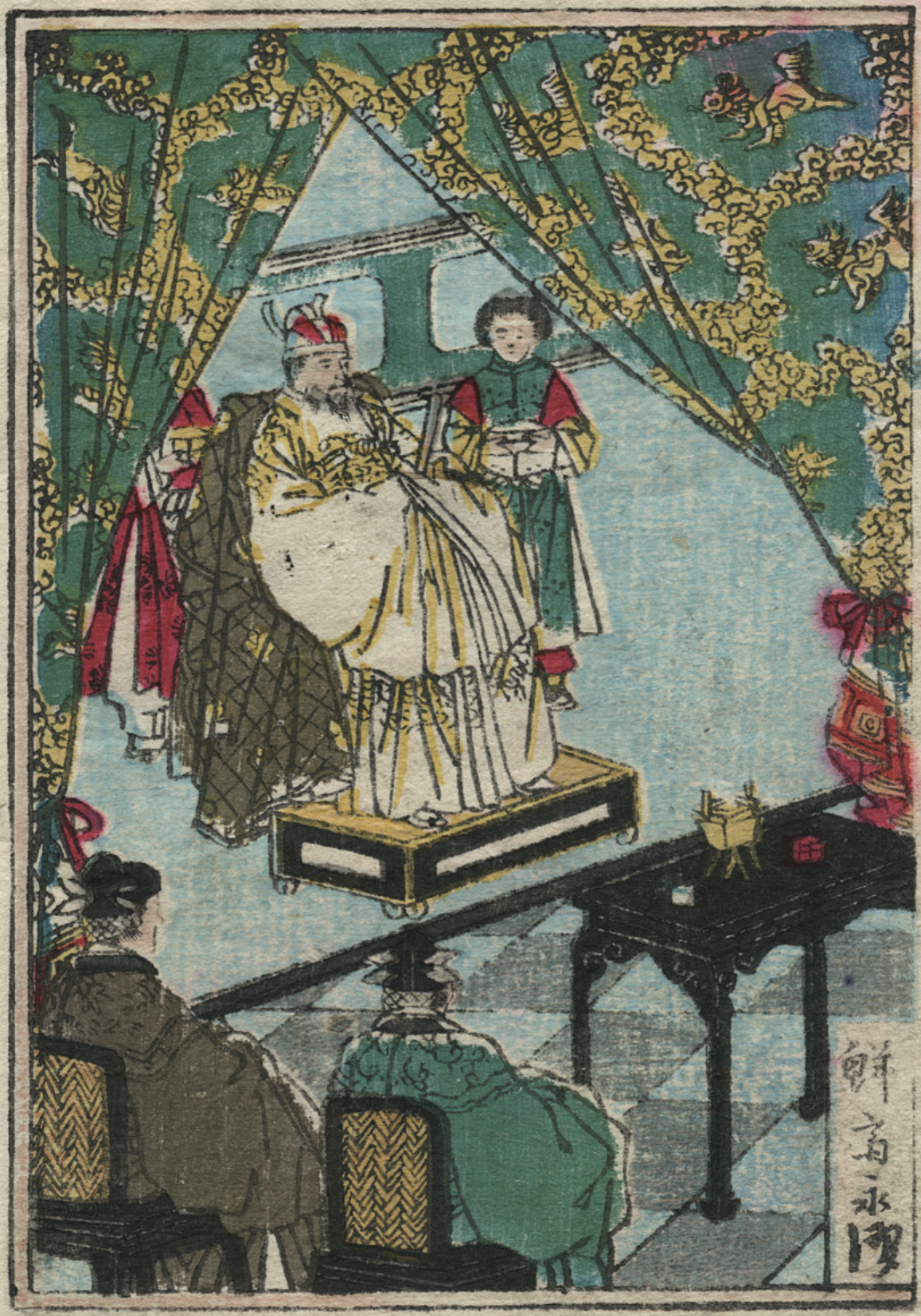
明治

明治英名百首小引

方今世ニ康慨志士傳ノ書多ク発刊セラルト雖モ多クハ文辞固陋ニシテ婦女童児等ノ能ク解シ得ルコト難シ豈ニ有志者ノ不注意ト謂ハザルベケンヤ今此書ハ力メテ解シ易カラントヲ要シ明治英名ノ百家ヲ撰輯シ銘ヲ肖像ヲ摸擬シテ上段ニ小傳及ビ詩歌俳句等ヲ掲録シテ以テ世ノ公ヲ此ノ冊子ヲ閲セシムルノ便トシテ國家ヲ思ヒ仁義ヲ篤クシ公道ヲ命ヲ致スモ敢テ畏レザルノ實ヲ英名傑士ノ志操ヲ養フテ人類ノ義務ヲ尽ス人多ク出ンコトヲ願フニ止ルト云フ微意ヲ添ルノミ于時明治癸未首夏松籟亭主人南窓ノ下ニ記ス

墨塘


花房公使
朝鮮大
臣談判
之図



御名を睦仁とまうし奉つり
仁孝天皇第一の皇子まして
御生母は従一位中山前大納言
忠能卿の女二位の局慶子
也嘉永五年九月二十二日
御降誕ましく万延元年
九月廿八日太子と立せられ
慶應三年正月百廿二代の
皇祚を踐せられ明治元年
八月廿八日即位の礼を行ひ
ふ尚宝祚万々歳を祈るのこ

明治天皇 新年祝言

御諱を美子とまうし奉つり
御父ハ一条故前左大臣忠香
公にて嘉永三年四月十七日御
誕辰也皇后かしこくも宮
中へ織殿を置自ら呉羽
綾羽の手振りを遊ばされ
或ハ女学校へのぞませられ
生徒の勉励を賞されまた
下民救助として御手元金を
賜るなど実ゝ賢婦人と称へ
申さんもおゝ畏多きこと也

皇后宮　新年祝言

日乃御旗高く
うるはしく
玉ふ
さきを
乃
あふぐわ
重ね
ありうん

宮ハ一品熾仁親王の王子
して天保六年二月十九日誕
辰也天質英敏まして王政復
古の際新征大總督を拝し
平治の後福岡藩犯規の件に
より福岡の知事を任じ明
治八年元老院の議官を補せ
られ幾ばくもなく議長に遷り
明治十年西南鎮撫として大總
督の命を奉せられ同年六月
旭日大綬章を拝受られそう

大勲位二品有栖川
熾仁親王

二葉より
松ぞ小ぢりか
もろともに
いろこそ
まさる
老木の
花

卿ハ國母二位の局慶子の父
ニて天資忠直温厚ありて
卿議奏たりし時攘夷の説を
たて幕府の因循を責其家
人田中河内介を薩刕ニ
し島津久光とちかり一旦洛北
岩倉山へ退隠せしがたゞま
ち中興の業ありて明治元
年従一位准大臣ニ補せら
れ後神祇伯ニ任ぜられ
ありし

従一位中山忠能卿

枝を打つも
波をも
染めず

川岸乃
苔ふみ乱る
青柳の糸

宮ハ孝明天皇の皇妹ゐ〻
く親子内親王と称ゝ弘化
二年十二月十一日の誕辰
あり文化元年十一月御歳
十六の折関東へ下向せら
れ徳川十四代の将軍家
茂公ゑ嫁ゐ〻ふ家茂公薨
せらるゝにより静寛院
と称ゝ明治十年病痾療養と
ゝく相州箱根溫泉へあらせられ
ゐ〻該地ゑて薨せさせたまふ

和宮
人皆は
おうろう
泡り
海
てゐ
ほこそ
ふるめ
伊勢の神風

公ハ幼稚ときより皇室の
衰へ〳〵を歎られ之を挽回
せんと心肝苦しめ為ゝ旧
政府の嫌疑をうけ六卿と
共ニ西國へ走り維新の際り
副總裁議定官ゝ任じ左
近衛の大将を拝し明治
二年左大臣ゝ遷り同四
年太政大臣を拝されこう
嗚呼其忠烈たれか仰ぐ
さらんや

太政太臣三條藤原
實美朝臣

おもふこの
思ひをゆめべしも
玉ほこの
みちおろ〴〵後さへ
たゞさらばかりなる

公も報國のため旧幕府
小譴責せられ岩倉村へ屏
居かせど益々赤心をか
め勤王の士と計りて王威と
恢復し慶應三年議定總裁
を任じ明治二年大納言を
拜し同四年外務卿を任
じ又右大臣を轉じ同年
特命全權大使となり歐
米各國をつうひし六年九
月帰朝なりたり

右大臣岩倉具視朝臣
彩色乃写そのまゝ
かゝる
大そ
り

田
鶴
の
孫高

公へ従三位中納言水戸齋昭
公の七男ゐて始め一橋家を
繼れしが慶應二年八月家茂
公の後を襲ぐ同年十月征夷
大将軍ゐ任じ同じく三年
内大臣ゐ任ぜ時ゐ王政復古
の期うを察し明治元年将
軍職を辞しめ政權を奉
還し駿河の國静岡表へ移
られうり世ゐ公を十五世よ
幕府といふ

徳川
源慶喜公

公はじめ和泉守といふその
性質英明ふかくして報國の赤心
厚くよつて慷慨の浪士隨從
せし文久二年四月入京し王事に
精勤せしかば朝廷より三郎
の名を賜ふ維新の際あむ
く策を奏し建言書數
通を呈す平治の後左大臣
に任ぜられしが辭して鹿
兒島に退ぞ
このまうり

前左大臣島津源久光公
なめつち乃
神の
まもりよ
くちぐ
もる
うけゝ
たゞしき
君がこのくに

公六旧防長二ヶ國を領し萩の藩主ゟり公皇國の威を震ゑんと攘夷の説を主張し赤馬ヶ関ゟ米舩を炮撃す幕府ゟ建白し皇室のため ゟ意外の節を顯ゝ終ゟ旧政府の嚴責をうけ兵を向らるゝゟ至れり維新の後その赤心を賞せられ位従二位ゟ昇進あり

従二位毛利慶親公

其ぼらきふ
つゝへまた
ゆるる

我身ぞと
おもへゝよ
仇みな花も
咏めぐ

侯ハ前少将兼長劭の大主ふ〳〵て實ハ旧周防徳山の藩主同姓淡路守元蕃の子ヲ て後本家慶親公の養子とふられさう公ハ父君と共に國威の衰廢を歎られ旧政府へ忠むく建言し后藩士と計りて朝家ヲ忠節ある事短紙ヲ盡し〳〵さし去れバ朝廷ふかく叡感を賞し〳〵給ひ従三位ヲ叙せらる

従三位毛利定廣公

幕府傍観手袖時

斷然

獨立攘戎

夷二洲今日

為焦土不讓

楠家楊義旗

公八旧土佐國高知藩主ゟ
ゝく土佐守豊信といふ
安政年間外夷我國へ渡
来ゝてより武備の嚴から
ん事ぜ旧政府へまをし
建言なせど執政用ひざる
を歎き朝家へ仕る事他か
しさゝバ有志者の渇望を
得たり后豊範公へ世をゆ
づりて容堂と名を改さ
められる

故大納言従二位
山内容堂公

桜茅花ゝて
もゝえ
深き
散ふし
ほゝ
末のもとふ
れゐでさゝらゝ
ゝこぞえまふらぬ

侯ハ前の越前の大守よ〳〵く諱を慶永といふ実ハ徳川十一世の将軍家齋公の二十一男なり去れバ徳川家の政事ゐ関〳〵總裁職とるおよろく屢々公平の論を發せど〳〵執政官吏用ひざれバ退職〳〵同姓日向守直春乃嫡男茂昭を養子と〳〵く世孜譲りて月花を樂〳〵まれとり

かけまくもかしこき
今日乃行幸の
墨田がそらも
なつかしの
庵よ

正二位
故松平春嶽公

公ハ肥前の國旧佐賀の藩主ふり嘉永年間旧政府各國と交誼を結びしより我が國威の衰ん事を深く憂ひあむく建議せしゝ幕府ふ譴責せらるゝふ至るよろて佐賀ふ退ぞき名を閑叟と改め肱股の臣を四方ふ出して王政復古ふ盡力す朝廷ふの功を賞され大納言ふ任ぜられそり

従二位鍋島直正公

おきなまし

やまと

錦

よ

そらぶれバ

かろうれおいも

あやな

かりそり

公八本性和田氏ありてのち桂小五郎と号て萩の藩士に
公江戸ゟ遊びて撃劍を齋藤彌九郎の門ゟうけまた西
洋炮式を江川勝氏等ゟ聞四方の英士と交り復古の業
ある及び總裁局顧問とあり後ゟ文部卿をうけられ
明治十年五月廿六日病んで西京ゟ薨ぜらる時ゟ齢ひ四十四實ゟ國家柱石の臣なり

内閣顧問木戸孝允公

心よし
花
さく
夜半乃酔
ざまし

公六旧鹿児島藩士ゟて通稱
桂市造といゝ隊ゟ長刀ゟれ
水戸氏ゟ説て薩長交を厚
ゟ王政復古ゟ及びて遷都
の義を建白ゟ或時ゟ欧米
各國ゟ使ゟまゝ特命全
權辨理大臣とゟて支那ゟ
ゟゝり拾の功短紙ゟ盡ゟ
がゝゟ悲ゟひ哉明治十一年
五月十四日兇賊の為ゟ命を
隕されゝり

正二位右大臣
大久保利通公
君ゟ母の
ゟ代を
ゟゝと
ゟぐ

公ハ肥前國旧佐賀の士ニして民平とよぶ世々佐賀侯ニ仕へたり幼稚ときより文武の學ニ螢雪の苦をおのぎ最とも律學ニ通せるを藩主閑叟公ニ命をうけ薩長土の士と復古の秘計をめぐらし明治元年朝廷より召ニて參與ニ任じ民部卿を兼同じく八年司法卿ニ轉じ又遷つて元老院議長ニ任ぜらる

參議兼司法卿
正四位大木喬任公

紀綱落地
七百年今日
錦旗新輝天

大仇一敗
旰瞻碎
百萬虎將征北邊

公ハ旧鹿児島藩士ホして始め陶蔵とよぶ若冠より医術ホ心を用ひ蘭學ホ積雪の苦をかさねそうり文久年間江戸ホ遊びて医業を開きそく名を松本某と改さむ大ひホ感ぶる事有て欧洲ホ渡り洋學ホ熟達し帰朝して國家の爲ホ盡力す召れて参議ホ任じ外務卿を

参議勲一等正四位
寺島宗則公
滿園風雪ホ更
天爐ホ閑
詩ざんてまず
ホ眠夜氣
白生虚室裡忽
磅礴憶雪厨前

公ハ毛利家の臣ニして通称を狂次といふ幼稚の時より兵学ニ志し夙と西式の炮術ニ熟達せり時ニ藩主毛利氏徳川幕府の罪なき得ず兵をきし向ふ公高杉晋作と共ニ兵を指揮して幕府の軍と戦ひ屢ゝ戦功あり後維新の際大ひニ力を尽し陸軍卿ニ任ず今ヤ参事院議長を拝す

参議正四位山形有朋公

数石死ス黙与中ニ機心ヲ銘自然通

両三ノ手

随時

杉恩

此肉郎 赤墨工

公ハ長門の國萩の藩士ふり通稱を俊助とよび素より勤王の志し厚く朝家のために四方ふ奔走す明治元年召されて兵庫縣令を拜命し后參議ふ任じ又工部へ移り賞勳局長法制局長官をも兼られしが明治十年工部卿も免ぜられて内務卿ふ任じ今參議ふ列せらる

勳一等正四位參議伊藤博文公

一夜涼風起滿

湖天秋色入

吟眸

悠々詩興何辺好

倚在洲半山ふ樓

公ハ通称を市之助雅号を空齋と呼て長州の藩士也兵学ヲ通暁シ元治元年ヲ数度戦場ヲ英名ヲ揚中ニも明治元年伏見の役ヨリ、東征の副参謀ヲ任ジ平定の後東京鎮臺司令長官となり兼議官司法大輔ヲ遷り佐賀及西南の役ヲ大功ヲ奏シ累進參議ヲ任ジ内務卿を兼ぬ

正四位參議山田顯義公

無風無月

在高樓簾外
殘螢従碧流涼氣
未消人定後蝸中
翻扇不能休

公ハ周防の國山口縣の人
也性溫順ふしく經濟学ふ
富ふり常ふ正理を解て朝
家の為其身を忘る皇威
恢履の後召されて大藏大
輔ふ任ぜられ一旦辭して
海外ふ遊たれしが再ふび
元老院の議官ふ任ぜられ
十一年七月參議兼工部卿
ふ轉じ連ふ累遷して又
外務卿ふ任ぜらる

外務卿正四位井上馨公

綠々紅々春漸深
芬芳早已
滿園林

花迎
蝶舞歸詩
思風引鶯
歌混酔吟

公ハ尾州の人なり〳〵く始め國之輔と申〳〵國学の博士たり去れバ藩士慶勝君の覚へ目出度慶應三年免されく参与と為り明治元年辨事被兼まて文部大輔り進て東京女子師範学校と設け同九年米國博覧會ゟ渡航し帰朝しく十一年議官を兼其後又司法卿ゟ遷任して

正四位田中不二麿公

公ハ鹿児島の藩士あり性
豪邁よく〳〵瑣事をかゝ
らず夙に朝家の為を東奔
西走し明治元年伏見戦争
の際無比の働きして英名
を一時に裏ろ後召され
て参議を任じ開拓使長
官および陸軍中将を兼
られ明治九年朝鮮へ使
として我國威を
輝やせり

正四位内閣顧問黒田清隆公
日暮天寒風雪飛
尺蓑寸笠到柴扉
數聲夜犬送吾
者似向芙蓉山
畔歸

公ハ鹿児島人ニシテ壮年
より幕府の暴威を慷慨
志西郷氏と最とも交リ
厚く或時ハ西京清水の
僧月照氏の為ニ困難を
たすけ明治元年東征の
際三軍をひきく勲功少
からざれば后左院の議長ニ
任ぜらるゝが明治九年脩史
局総裁兼一等侍講ニ
遷らるゝ

正四位伊地知正治公

月下漁翁鋪草莚

芦州繫駐

二三舟

鳧鷗

片々平沙岸曲

浦逍遥垂柳前

氏ハ鹿児島の人なりもじめ
吉之助別号を南洲といふ
性質勇猛みゝて英才非凡
あり嘉永年間皇威を輝
さんと四方を奔走し幕府
の厳責をうけ僧月照と
西海ゟ走り大政復古の後
正三位ゟ叙し陸軍大将ゟ
任ぜしが明治六年辞て帰
県し同十年叛旗を飜し賊
の汚名をのこしぬ

西郷隆盛公
辞世

つゝぎぬへ
さもあらばあれ
大君の
辺まもる
ほこそ
をのこの

卿ハ薩劦の人隆盛氏の弟ふ
り幼ふして兵書ふ眼をさゝし
報國の志ゝを貫かんと艱難
を事とせび戊辰の役ろ功
勞もつとも多く朝廷召し
て陸軍中將ふ任ぜ明治七
年三月台灣人問罪とゝて
卿を事務都督とすよつて
蕃地ふ航し我が國威を示し
後丈部卿より陸軍卿ふ轉
ゝ今農商務卿ふ任ぜり

參議正四位西鄉從道公

明籌奇策
不可模
正勤王
事一
是
真儒

公ハ肥前の人ホーて通稱を八太郎といふ旧鍋島家ホ仕へたり豫て諸國の英士と交り藩主閑叟侯解て王政復古ホ盡力せり明治元年朝廷召ーて參與さりしが參議ホ移り經濟学ホ富さるヨ依て同七年大藏卿ろ任ど參議を兼ぬ後官を辞ー政進主義の一黨派を組織ー該黨の總理さり

舊參議勳一等正四位
大隈重信公

林々似帶夕陽明十六里

景清

堤勝

春日偏如翻錦繍時看翠柳點桃櫻

公ハ土佐の人ゝして生理学ゝくにゝく其才非凡るゝ依て故容堂公の寵偶厚ゝ先ゝ旧政府の傾覆せんゝ事ゝ察ゝ藩主を補佐ゝて皇室ゝ赤心を盡す明治元年参謀を命ぜられ平定の後参議ゝ任ゞ民権議院の説ゝ主張ゝ容られざるゝよゝて其職を辞ゝ自由黨員の長ゝり

前參議正四位板垣退助公

出師未曽汚天兵
一死只期竹帛名
彈子飛行
亂如雨
喜看壯士
躍登城

公八旧徳川政府の旗下の士
より始め隣太郎と云ふ
安房守たり文武とも其學
ふ長し西洋の事情に着眼
し和蘭に渡航して海軍術
を得帰朝して軍艦を司
どより徳川家瓦解の際困
難をおのぎ主家の為め盡力
せ后召されて参議に任し
まて海軍卿を兼らる後官
を辞して閑逸せらる

前海軍卿従四位
勝安芳公

窓の画よ
かき附る
かけとゝめて
よりの窓ちかを
たぐよふ船の形
あらす為

公も徳川藩下の士にて
通称を釜次郎といふ海軍
術の蘊奥を極め又陸軍も
長ど徳川家帰政の際脱兵
をひいて箱根まで至る其軍
略法を叶ひ外客も之を賞
し英名五大洲まで及ぶ又各國の
語学も通ず朝廷召して海軍中
将まで任ど魯國の公使まで轉ど帰
朝して海軍卿を拝し今清國の
公使とありて清まで在す

清國全権公使
榎本武揚公

長林烟雨
鎖孤
栖未
路英雄意
轉迷今日中
来人不見覇王
樹畔鳥空啼

公八薩州の人にして通称
找金之亟とよぶ幼にして
英敏あり元治元年藩主の
撰ま當り米國の留学生と
成て帰朝し維新の際議事
体裁取調掛りを命ぜらる
時ま公脱刀の議案找いご
す明治三年少辨務使
ま任ぜられ同八年特
命全権公使ま進て支
那ろ駐在されたり

従四位外務大輔森有禮公

滿開髙幹
萬枝紅

日霽光
暉散室中二六月
三旬花未謝白雲
帶處似二江虹一

公ハ池田侯の藩士ゆえて天惟
英邁嘗て朝鮮国領事を拝
し朝鮮に滞在せる時ゆ朝
鮮の國父大隠君の内謀ゆ除
し暴徒我が公使舘を襲ふ
舘内公ゆ従つて居合すもの
十有余人暴徒我舘を囲もも
の二千有余石礫をなげうち
矢を飛し舘の外塀を毀つ
て正ゆ乱入せんとす時ゆ公自
若として衆ゆ向ひ曰く衆寡固

魯國公使花房義質公
堂々威風動
百里ニ
芬々英名
溢滿洲ニ

より敵せじと去りなんど座して暴徒の為に空しく死せんより八寧ろ一方の血路を開き此の難を避けて後援ひを王城に請んと衆この議に同ど一方を開ひて群ら暴徒を衝き逃る近藤真鋤君お其他の人々も共に囲みを抜て両路を艱歩ー辛くして仁川に至る暴徒又襲ひ来る小舟を得て海中に避く渇英船に援けられやうやく長崎に皈る

外務少書記官従六位近藤真鋤君

兵者不祥之器非二君子之器一

公八旧幕府の臣にて号を
鉄舟といふ壮年の頃より撃
剣を嗜しすぶる此術小長
せう且博識にて詩文をよ
く書小名あり戊辰の際
勝安房守と共に幕府と尽
力せられしが後終小駿府
小引篭る朝廷公の英名な
るを以て召出され今宮内
大丞小任ぜらる世ろ正義
の名望高し

山岡鉄太郎公
徒過四十年
好計有二
閑眠一
世
上
何多
事漫
然一
懶倦

公名ハ純彰とよび世々幕府の臣たり夙ゟ兵学を脩め式銃佛人ゟうけ歩兵練法伝着ㇾ戊辰の役ゟ千六百余人を率え脱ㇾ各所ゟて奇計を廻らㇾ後降伏ㇾ明治五年開拓使五等出仕を命ぜらㇾ大蔵少亟を兼同八年工部省四等出仕ゟ轉任ㇾ其後同省の大書記官ニ遷り工作局長を兼らㇾ

寸條尺幹見ㇾ花神玉骨氷姿
也是真盆裡呼為ㇾ小庾嶺
春風不ㇾ許散芳蘼

従五位大鳥圭介公

公八土佐の人ゝ〳〵旧高知
の藩士たり別号を玄華と
ふ山内容堂君の愛子あり
万延年間天下一變まべき
戊辰ノ同藩の諸士と倶ゝ
勤王の説戊とるへ明治元年
参与を拝命ノ横濱港を
惣轄ノ后参議ゝ遷り
明治七年辞職ノ〳〵
高島の炭礦戊
開られたり

従四位後藤
象次郎公
松風細雨酔眠
醒窓外閑聞蕉
葉
聲
寂寞枕
頭微燭影
令霄幽室
懐歸程

公ハ肥前佐賀の人ニして
通称を二郎といふ性文事
技好そく和漢洋の学ヲ通
暁せ維新の期ヲ望そ國
事ヲ尽力す召されて議
官となり民撰議院の義伐
建言ス明治六年外務卿
に任ジ清國ヲ使ス台湾の
件を談ジ後参議ヲ任ぜら
れしが同九年辞ス支那
を遊歴せらめたり

従四位副島種臣公

公はもとゞめ楠左エ門といゝ後ゟ大一郎と改むる土州の藩士なり壮年東京ニ出若山荘吉大橋訥庵等の門ゟ入つゝ勤学す文久三年朝命ゟよつゝ学習院御用掛となり維新の際ゟ尽力ゟ明治元年江戸府の判事ゟ任ゞ後枢密大史まゝ大内史等を命ぜられゝり

正五位土方元久公

梅りゆく
春ゆく
ゝとゞ
吹風の
なりゝ
宮め
ぬ
ゟ

さそふらん

公字八士德号枝成齊通称
を厚之亟といふ鹿児島の
藩士なり初め昌平舘ゟ入
つゝ学枝脩め藩主の召ゟ
よりて邸の学校を督す英
國の軍艦鹿児島ゟ来り
時英人と應接す明治五年
朝ゟ仕へ諸官を經て當今
一等編修官ゟ任せられ万
國公法和解編年日本外史
等を著されたり

従五位重野安繹公
柳飛落花暮春天
旅恨思家難就眠
樹裏
殘鶯
窓外
囀
亭待得尺
書傳

君ハ豊後の人長允の男ニて名を英といふ幕府瓦解の際父と倶ニ長州へ脱ー大ひニ勤王攻唱ー国事ニ尽力少なからず維新の時召されて一等侍史官を拝命せらるゝ後官を辞ーて閑居す君ハ常ニ詩文をよくー能書ニ名ある人皆世人の知る所なり又画ニも妙を得たり

長三洲

草樹連天緑似苔
白河引帯抱
城回蒼
茫客思欲無
際七十二湖
秋色来

君ハ旧岩村藩士平尾錄藏氏の女なり初の名を於鈩と云天質英邁ようして和歌抔好ミ年十三の折千草の染替五巻をならひ漢学和漢を兼明治五年宮内省十五等出仕ゟ補せられ御書物掛りを命ぜられ幾程もなく権命婦抔拝命す画上の詠ハ歌と名抔賜りゟときよゑるなり

平尾歌子

おどろ
おれ
袖
に
なみだ
はらむべき
大内山の
若葉を

公ハ鹿児島の世々島津矦へ勤仕す始め帯刀と
別號を観瀾とよぶ書画を善ク文学ヲ富國家のため
ヨク諸矦を説て王政復古よ
配慮あり維新の功成奏す明治元年参与ヲ
任ド程なく玄番頭ニ遷りもつぱら外國の事務
ヲ関せしが辞職して後浪花ヨ病で没せり

従四位小松精廉公

公ハ長門の人ゟして俗称を兵介とよぶ宜君侯を補佐して西京ゟ遊ひ木戸公等と皇威を挽回せん事ゟ謀り明治元年参与ゟり此時貨幣の缺乏を補んと紙幣製造の儀を建白し後ゟ参議ゟ任ぜられしが明治四年一月五日兇賊のために暗殺されたり

贈従二位
廣澤真臣公

渺々秋江
萬里
風
亂
飛柳葉似
颦蓬汀邊月
出煙光淡暗發
寒色入艇中

公ハもと長門の藩士なり
始益二郎といへり別号を淵
山とよぶ夙ニ尊王の説を
主張し藩士二黨ヲ分れし
時も大ひニ俗論派を説破
し幕府の兵を討明治元年
士卒をひいて奥州ニ功を
顕し後兵部大輔ニ任ず同
四年廃刀の儀を建言し為
ニ俗士ニ傷つけられて鬼
籍ニ入りぬ

兵部大輔大村永敏公

或やんとおもひ
君公を悼し
みよ

後ハ
実ニ
功ハ
有の
梅の
花

公ハ旧肥後の人なるく始め
平四良諱を時存といふ其
才非凡なるく議論人の意
表ゟ出るゆへ同藩士等
用ひず去つて越前ゟ至り
松平春嶽君の寵を得ゝり
維新の後参与為りし
が欧州の文明を大ひ
ゟ讃美せしゆへ明治
元年正月西京なく俗
論士のゝ為ゝ害されたり

前参與横井細陽公
偶来踈雨夕風
微池上水乾
秋草肥
日暮
坐
床空
酣月何堪流汗
濕衫衣

公ハ初の名ハ守部といふ土州矦の愛士なり幼年よりして安井息軒翁の門に入る戊辰の役に大軍監を任じ軍功あもく成りバ鎮静の後陸軍少将に昇進し熊本鎮臺の司令長官と成時ハ明治十年二月薩の暴徒熊本の城ハ囲む公挫折せじ篭城しその名を満天下に輝やせり

正五位陸軍中将谷干城公

一夕西風柳岸邊
虫聲嫋々入籬莚
晴来銀漢露床上
万里歸心不得眠

子ハ鹿児島の藩士なり天質温厚よく兵学よく通達し学和漢をうぬ戊辰の役よ伏見よ戦ひ東京よ入りて彰義隊を征せ平治の後陸軍少将よ任ど近衛兵長官たりしが人望最とも厚し西南暴徒の巨魁と仰がれ吉治越ろて戦死をとげたる

篠原國幹

古蕉笠のかうも
なるも本も
かくれ
ぬと
ぞ
なるを
おも
ん

子ハ鹿児島の士族ニシテ
信依と称せ性豪氣ある
ヲ以テ藩主の命を受て國
老平田某を討肥後ヘ潜む
戊辰の役ニ會藩を討ク大
功あり平治の後ニ正五位
陸軍少将ニ任ジ熊本鎮臺
司令長官と為リ辞
シテ帰縣シ明治十年
暴徒の長とあり城山
ニ亡びたり

桐野利秋公

都ある
あゝしの
花ハ
引
ろ
へく

ちるその深山ハ
桜の形

公八越前の人なり代々
福井侯ニ仕へける始め三
岡八郎と呼天質文学を好
て品行最とも正一時ニ安
政の末天下ニ輿論おこる
公主君を勧て徳川家の為
ニ策を呈す維新の際召さ
れて参与となり後東京
府の知事ニ任ぜられ轉ず
て元老院の議官を
拜命せり

従四位由利公正公

おとの
さまの
すきし心の
花も
みちる白ちゝ
ゝ来ゝ
ゝり

公八鹿児島の藩士にて幼より漢学を勉強し年十八藩主に撰まれ英國に留学おす事三ヶ年明治元年米國に留学し同ド年四年帰朝して租税権頭に任ド又大蔵少輔に遷り同五年理事官として英國に航し同七年特命全権公使に進て米國に駐剳されぬ

従四位特命全權公使吉田清成公

籬外風威早報陽庭前又是有芬香一枝梅却陪千樹可愛人間樂未央

公ハ旧幕籏下の士より東京の人となり始め右近将監といひ大監察使となりしが長崎奉行を遷り越中守を任ぜ天質和漢の書に好て経済学を脩む維新の際旧幕府の為ニ尽力を明治五年文部省二等出仕を命ぜられ同年東京府知事ニ轉任し同九年教部少輔と成同十年議官ニ遷られる

議官大久保一翁公

写真させてもらふ事を乞ひ
ましたれども
せでは
ならぬ
とて
写
して
くれ
ました
ので
ここに
掲げ
ます

君ハ因州鳥取の藩士にて
幼名を伊三郎といひ少より
頴敏の聞へあり夙に勤王の志
厚く維新の後滋賀縣令を拝
し政治上大に功あり世に三縣令
の一人と称せらる累進年を追て
明治十一年東京の知事と為ら
れ府民の為に幸福を冀圖
せられしを算へがたし措て其
十五年七月六日四十三年を期
として鬼籍に入りぬ

故東京府知事 松田道之公

公ハ旧鹿児島の人ニして通称を正之進といふ性撃劔を好てまゝ西洋式の練兵ニ熟せ戊辰の役ニ藩の兵器奉行ニ撰まれ明治四年東京府大属と為り同五年大警視ニ進て各國ニ航して警察の法を調査し帰朝して陸軍少将を兼ら逆西南の役ニハ屢々大功を奏せり

正五位陸軍少将大警視
川路利良公

君ハ始め格之助といく鹿
児島の士ゟしく初め茶道
たり天質武を嗜こ居合の
妙を得ゟう戊辰の役ゟ参
謀ゟう平治の後鹿児島縣
令ゟ任ぜゟう明治十年西
郷隆盛の暴動を助けゟう
ハ勅使下向の折伴ふて神
戸ゟ至り縛ゟ附同年九月
三十日長崎ゟく斬罪せられ
る時ゟ年五十二ゟり

大山綱良

公ハ旧土佐の國高知の藩士ふしく天質文学技嗜ミ膽力衆ヨ勝れたり時ヨ明治六年二月上旬佐賀縣の頑固士族等征韓論ヲ口実とおし暴動ヲ及びたり公人望ニのるり依く佐賀縣権令ヨ任ド任所ヨ下り兵を指揮し鎮定の後縣下を撫育し愛媛の縣令ヨ轉任せり

正六位愛媛縣令岩村高俊公

一縣動揺

分黨

派封

建征韓論

右岩村礫水叟

君八下總佐倉の人なり初め武術を心掛寄りしが後東京に出て蘭書を学ぶ慶應三年幕府の命をよろこび米國に航し維新の後開拓使大藏省等に出仕し明治六年澳國の博覽會を赴き彼國の農学を感じて媒助偃曲氣筒の三事を我國へ傳へ学農社をたてられたり

東風日夜轉紡車　津田仙

金縷綿々繰出斜

光映青雲垂百尺

欲為經緯織春霞

君の名は尚中本性は山口氏より下總小見川の人なり初め寺門静軒の門に入りて漢学を脩め佐藤泰然より蘭学ならびに外科截断の術をうけ私立病院を建て弘く衆を療治す是我國病院の始めとす明治二年徴をめされて文部大亟兼大典医に任ぜられたり

佐藤舜海

爽氣開襟稲
熟天詩文經
歴列二
瓊筵一此
中交得和漢
説別有二和蘭書一篇

君八舜海翁の長子ゟして
医を業とす明治元年獨逸
國ゟ留学し澳私大利亞ゟ
ゟそび勉学し博士
の名譽ゟ得同八年帰朝
し須天堂病院を總轄し
出藍の称ゟり明治十
年西南の乱ゟ際し陸軍
医監となりて出張し
大坂病院の
長とるゝれり

従五位佐藤進
一輪如鏡滿
清川
雲影
茫々
收

淡煙現見
趣心融神會意悠然

墨田中流

君八豊前中津の人ゝして
天質非凡あり弱冠郷里を
出て大坂ゝ遊び緒方洪庵
の門ゝ入て蘭書を学び万
延元年米國ゝ趣き後幕府
の使節ゝ隨つて歐州を巡
回ゝ帰朝して西洋事情を
著し慶應義塾ゝ開き尚
数十部の翻譯書を著述し
て世ゝ裨益ある事ゝ
て筭へがたし

青均含露拂蒼空
暁霧晴時聞早鴻
柳葉飄々黄葉
下水村山
郭闊
秋風

福澤諭吉

君名ハ正直通称ハ敬介と
い〳〵東京の人なりそが
昇平舘ヨ入り漢学を脩
めまゝ大坪蓬洲ヨ就て
洋書ハ勉学ゼ後幕府の
命ヨ依テ英国ヨ留学し帰
朝して博士の名ハ裏ろす
譯する書数十部の内西國
立志編尤も行ハる后女子
師範学校の摂理ハ命ぜら
れ幼稚園を立られる

中村敬宇

時頼微服
旅行圖

曾無三議論及二
經濟一王覇漠然
心不レ関一意欲レ知二民
疾苦一草行露宿道途難

君ハ上州舘林の農なり慶應三年徳川昭武君ゟ隨ひ佛國ゟ留学し其後召されて大藏大亟兼紙幣頭ゟ任ぜられ二等出仕ゟ補し澳國博覧會事務を兼明治六年職を辞し第一國立銀行を立是我國銀行の始なり又華族鉄道會社を結び折も總理を托されたり

渋澤榮一

幽窓書室外

山雨半

空

中

蕉葉翩々

響知應動

夜風一

君ハもと鹿児島の藩士也
夙ゟ英國ゟ至り其形勢を
察し商法ゟ着眼を維新
の際召しく大坂府の判事
外國官兼務ゟ任ぜ戊辰
の役ゟ坊城陸軍將摂泉
防禦として大坂ゟ出張す
君軍器粮食とうを弁ず
後官を辞しく礦山を開
き株式會社伐りもうけ銀
行ゟ從事せり

五代友厚
古買山
萬布の
袷ごろ
あれや
夕涼

子ハ佐賀の士族なり和漢の学ヲ通じ又刑法ヲ攻メ一戊辰の役ヲ功ヲ奏シ正四位ヲ叙シ参議司法卿たり時ヲ明治五年征漢民撰の二議を主張シ其説容られざるヲヨツて辞職シ帰縣して暴動の長となり官兵の為ヲ敗シて高知縣下甲の浦ヲて縛せられ斬ヲ処せらる時ヲ年四十二

江藤新平

国を思ふ人

ヲ知らめ

武士のおろぼくしのそで

袖乃あそぶも

子ハ長州萩の士族なり学和漢兼廣く衆と交り皇室の為ゝ尽力せしハ維新の後新潟縣の判事ゝ任ぜらるゝ兵部大輔ゝ進ずるゝ特論の容られさるゝよゝく辞して帰縣し明治九年十月暴徒の巨魁とゝり縛せられ同年十二月三日誅ゝ附時ゝ年三十九なり

前原一誠

そもゝ心あらばや
かゝるゝん
業ゝも
花ゝも
せ

子ハ旧豊前中津奥平の國老たり文字冊碁等ヨ長たり事故ありつゝ中津を脱走ー萩藩毛利家ヨ勤仕ー維新の際屢ゝ功労奏せーゥバ佐渡縣の参事を命せられーゲ職を辞ーて帰縣ー前原と交を深くゝ暴舉ヨ加膽ー汚名ヲ千歳ヨ残せり

死生亦大豈偶然
此夕従容入九泉
千歳是非
公論在
口碑
傳

奥平謙輔

子ハ山口縣の士族ニシテ
文学を好ミかつて
和歌を嗜む人望有を以
て區長を奉職せしが慷
慨の志ニ堪ずよりて
きりよ攘夷の説を唱へ終
よ神風連の巨魁とあり前
原等と計つて縣令安岡
氏を斃し勢ひ盡て
遁逃ニ宇龍港よ縛せ
らるく刑よ付とり

ますらをの
雄たけき
名を
日と
肉と
おのづから
世ろよ山めむ

横山俊彦

子ハ長門萩の士族ゐして前原一誠の弟あり維新の際功有りしより陸軍少佐と為り熊本鎮臺歩兵第十四聯隊の長となりしが明治八年十二月俄ろ官を辞して帰縣し兄と同意して暴徒乃魁となり後宇龍港ゐて兄と倶ゐ縛せられ又賊名を残しぬ

山田頼太郎
皇道衰残亡國風
清姦」
策破事
成空精神遊
散兩間裏断
首當年表忠魂

子八長州萩の士族なり一誠の従弟なり性豪にして撃劔を好み叔父の返逆に一味して戦争の折各所を騒がし軍破るゝの後囲を逃れ鹿児島に潜りて桐野利秋を頼りて私学校に入りしが西南の暴挙に加勝ちをぐ勇を顯せし肥後川尻にて目覚しき働きありしが討死したる

寒樹深埋積雪中浮香獨自發奇工踈枝折取非無意牀前為欲補春馀

前原一格

子ハ熊本藩士おーを力あ
くまで強く又撃釼ゐ長せ
り性猛烈おして人ゐ後る
ゝを恥よつて神風泓の
頭と立られ政事上ゐ不
平をおらし攘夷封建の
説を主張し終ゐ頑愚の
徒と牒し明治九年十月廿
四日同所の鎮臺を襲ひ目
覚しき働きしく其夜戦死
をとげゐ

うちひさす都あうよ
おりおくべ
ゐ里の留ゐ
勅ゐ
のま
ど
を

上野堅吾

子ハ通称を栄太といく熊本藩の卒族なり勤王乃志し厚く平野次郎安積武貞の黨ゟ入り維新の後篤志を賞せられ士籍ゟ入り清正公を祭祀せる錦山神社の社司ニ任ぜらまこゝゟ前原ゟ一味なり安岡縣令の宅をそひ暴殺なり一時猛威を震ひける

加屋霽堅

汎なる人ゟ
憎みそゟ業だの
殺りてそ
あきこゝゟ
ありそゟ

子八東京府士族ゐて通称
園右エ門といふ豫て皇室
の為ゐ赤心をひらゐし維
新の際武官の重職よ昇り
しも才伎乏しく遂よ免
官となりしゃべ大ひよ不
平をならし江藤新平と倶
よ佐賀よ下り暴徒の巨魁
となりしが明治六年三月
七日鹿児島城下よて縛
ゐをきぬ

水晶盤裏錦波流一帯
飛橋十里浮万舩櫓聲
霞外動五洲山色
望中收

島義勇

子八鹿児嶋の士にて隆盛
が甥なり文武の二道に熟
達し夙に勤王家とよばれ
たり隆盛を補けく四方を
奔走し維新の後武官に
附しが僅ふまして辞職
し古郷に帰りて礒村に
閑居し常に少年輩が
軽躁を戒めしが叔父
が逆意に随行し死をも
共にふかるとぞ

西郷小平
ゆかせ給ふ
おもひ
覚
悟
よ

子八鹿児島の人ゝ〳〵名は常光といふ才略有且勤王家ゝして志むく長州ゟ往來ゝ維新の後宮内大亟ゟ任ゞ岩倉全権公使各國へ派出の折隨行ゝて歐州ゟ留りゝ〳〵ゟ西郷隆盛辞職と聞帰朝ゝ西南の暴舉ゟ大隊の將とるゟ城山の露と消ゟ

村田新八
決心偏欲開二前
一莿却以二淺謀一
逢蹲暗呼レ狂
呼レ暴任二人評一
桃紅李白
自然
色

子ハ鹿児島縣下櫻島の人
うーく撃劍の名ある性
猛烈まーく水火も物の數
と せず東征の際戰功數回
ありしかバ鎭靜の後陸軍
少佐を任ぜられしが職を
辭ーく西郷隆盛と共ゐ帰
縣ー西南暴動の折も大隊
の將とあり田原坂まで防
戰あー後城山の露とぞ
きへたる

別府晋助
しろやま
の
まつ
も
乃

つまで
武士ぢ赤き
こてろ
ぬ袖振り
つゝ
偖へよ

子ハ熊本の士族ゟして学
和漢を兼砲術ゟも通暁せ
りされバ戊辰の役ゟ大功
あり後ゟ参事と成ルゲ
辞シて鹿児島ゟ遊びまさ
熊本ゟ歸り明治五年のさ
ろ島津久光公ゟ隨ひ上京
せシゲ歸縣ス一の学校を
建生徒ゟ教育ゐシ居ル
ゟ西南の暴動ゟ組シ十月
廿五日ゟ縛せられル

池邊吉十郎

千畝緑陰
細雨中數
竿竹色

露玲
瓏避炎夜坐堪忘
爰恰似窓前秋氣通

子ハ會津の藩ヨーて始め
敬次郎といふ維新の後ヨ
斗南藩の參事ゐりーが
職ヲ辞ーく東京ヨ出で
湯島天神下へ学校ヲ開き
志ヶ酒のためヨ人望を失
ひいろーク前原の姦謀
ヨ加膽ー千葉縣聽を襲
もんと同志十余名と舩
ヨ乘りーが小網町ヨく
縛ヨ附後斬せられたり

永岡久茂

古美術

於秋ハ肥後熊本なる商人某の女にて容貌の勝れたるのみならず怜悧にて糸竹の道もよくせし利秋熊本在勤の折數多の金を出して妾とし帰縣の折鹿児島へ召連れしが暴徒の際もあだく利秋を諫め尚日向宮崎の陣中へいたり再び諫めて赤心を示せしとぞ

利秋の妾於秋

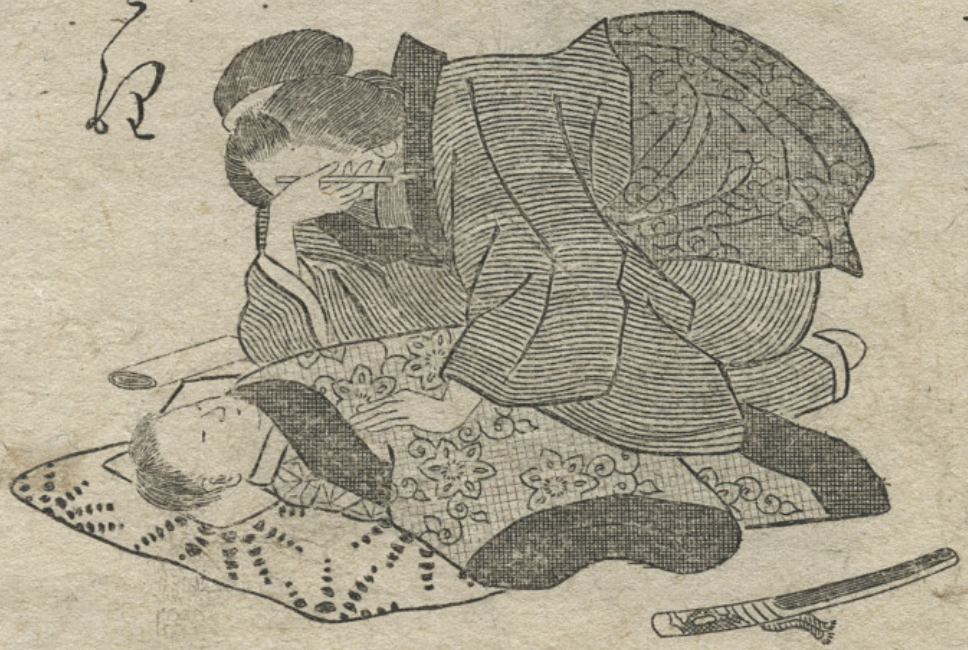
故浪花の吟

人込の中へしだるる柳かな

浦子ハ佐賀縣士族遠山某の女なるを妻と成り
より夫婦中睦まじく男子一人もふけしが夫妻ハ
前原と合躰し暴動ゐ及びける或日宅へ戻りしを
バ浦子ハ夫の妻ゐ向ひ妻子ゐひろめ未練を起さバ
不儀者の上ゐも恥辱ゐ
と諫め勉ハ我子を害其身も即座ゐ自殺ゐしたり

馬木妻の妻浦子
妻の辞世

山坂ぬくちらかゐくとも
あめつちうごく
ハ他の動
人の沫
なり



子ハ鹿児島の士にて幼きより万斎とよび茶道を勤めたり性豪勇にして撃劍に熟し戊辰の役に功を顯せり後陸軍少佐に任じ大隊長たりしが開拓使大主典を兼北海道に趣き屯田兵の長となり職を辞して帰縣し桐野の為めに進めらるゝ暴動に加り謫して御舩にて割腹せり

永山彌一

古鬼面

子ハ大分縣下中津の人
常ゟ我國威の衰ろえん
事を歎き外客を仇敵と
視ゐ〳〵鹿児島ある私学校
の生徒と交り文才あるゟ
依て我縣下ゟ發兌せ〳〵
田舎新聞の編輯長となり
しが西南の逆徒ゟ通じて
中津反賊の巨魁となり後
縛せらるゝに斬ゟ處ぜ
ら被れたり

増田宋太郎

國ゟ為め
ろろ
ばく
ー
ゟ
國の
歎ろり
ゐり

せん
すべ
ゐー

子ハ高鍋の藩士まして初め桃太郎といふ安井翁ヨ随がつて漢学ヲ修む維新の際東西ヨ奔走して名をあら㆓後新浮の判事ヲ任ぜられまた弾正少忠開拓幹事ヨ遷られしが官を辞して帰縣し鹿児島の逆意を助けて高鍋藩士ヲ煽動して一時暴威を震ひける

阪田諸潔

其名ハらぎの沸世も乃ろまま

くいろ子ハ長崎縣下竹松村の士族寺井亀太郎の妻なり神風連の暴舉の砌り警備の兵伐募らるゝと聞夫亀太郎小刀を帶く戦地へ出張す時夫へ太刀を渡さんと會所へ至れど早進軍せし跡なれば夜陰單身艱苦、攻凌き武口ようやく追付太刀を渡す朝廷其貞操を厚く賞されける

寺井くいろ
なるとけく
聞はさり
なり

一つ松

古琴麗

子ハ長崎縣下島原の士族
同姓量太郎の弟ゟ文学
修行のため東京へ出種田
陸軍少將方ゟ寄食し熊
本鎮臺司令長官ゟ為り
任所へ赴くゟ付君も倶
ゟ下りしゟ暴徒ら種田
氏を斬害せしゟバ思人乃
仇敵うたんと單身ゐそ
暴徒と戰ひ義のため
討死せり

大槻丈夫
古嵐

君ハ鹿児島の藩士なり本
性ハ森氏なるも有礼氏の兄
なりしが横山氏ゟ養れて
人と為る性忠直清廉ゟ
て文学技好て東京ゟ遊び
ゟ田口文造の塾ゟ入りし
が官吏の驕奢を悪ゟ時敝
十ヶ條并ゟ征韓の非を論
ぜし書技残しゟ屠腹せり
時ゟ明治三年七月廿七日
享年二十八歳なりけり

古桜斐ゟ

稲つまや物よ
のこりてもゝせび

横山正太郎

瀧子ハ旧陸奥國津輕弘前
の藩士棟方氏の女なり幼
きより文学を好こ和漢の
書ゟ蛍雪の功を積こまゝ
武を脩む年十九ゟして同
藩の参政毛内有右エ門ゟ
嫁す然るゟ藩士二派ゟ分
れ奸黨の為ゟ夫有右エ門
禁錮せらる瀧子先妻の子
三人を育勇ゟ仕へ怠らず
其貞操遠近の亀鑑となり

毛内瀧子

君ハ名を長綬通称を伊太郎といゝ上野の人なり長野豊山の門ニ入つて文を学び松崎慊堂ニ就く経典を脩む幕府召出して甲府徽典館の教授として任満ち寺社奉行留役ニ遷り嘉永五年参遠の縣令となり後羽州ニ轉任す鶴梁文鈔一讀してその才を知るべしなり

林鶴梁

池水涼風至倶忘

赤帝遊艸中宵燭出黙々眼前流

君ハ下總佐倉の人にて別号を木堂といふ壯年東京に遊びて幕府の官医辻元崧庵の門に入り苦学年有余抑東京の地たるや卑濕なるにより脚氣に病者多し君早くも脚氣療養の著眼ありて大に發明なす事あり脚氣病院を横濱に設けて患者を多く救ひ給ふ

遠田澄庵

松林迷失路

小經纔相通

欲望下

清泉掬

孤村似畫中

君ハ日向飫肥の藩士なるが
名は衡字を仲平といふ夙
より江戸に出古賀精里に教
を請け昌平黌に入り螢雪
の積ぐ勉学し文章最とも
絶倫あり数年を歴て帰郷
す嘉永年間幕府君を挙て
昌平館の儒者とす後辞し
て生徒を教育し世に文
章六大家と賞する其
一名なり

安井息軒
人性之善勿論
爲爾其論之
乃
叔
世
之事也

僧八性を岳と云〳〵又名を古仏とよび豊後日田郷叶田村の人にて真宗上人也廣瀬淡窓に就て漢学を修め詩文とも凡庸の所為ならず中年より至り始めて画よ心を寄その奇韵を見る者驚嘆拍掌せざれど意よ適ざれバ数月筆を採らず世よ逸雲錵翁杏雨と僧を九州の四仙という

僧五岳
我年過二五十一情
況稍蕭然
手熟
画差
俗才衰
詩却
園

君ハ信州松代の藩士すて幼名を啓之介と云ふ才略衆に超え學和漢を兼ぬ幕府専政の時ニ當つて獨り卿関を脱し諸藩の名士ニ訪ひて国事ニ肝膽を砕き益く勤王の志を厚ふす外国交誼の説一ニひ幕府の聞處く依り縛せられ囹圄の中ニ數月を送る後寃解け京師ニ上り木屋町ニ於て暗殺せる

佐久間象山

一跌歸休深
鎖門不那憂國寸心存
但欣天詔在
今日有契當
年狂妄言

君ハ美濃の産ニして名ハ養別号を万里翁といく医を業とす性酒枝嗜み世事ニ関せず詩文ニ工ニして書ハ凡骨枝もとめぬ山水最とも妙を得たり曽て支那ニ遊び諸名家ニ接きて画事枝討論し勉学おこたる事十余年帰朝して益々その名高く彼土の雅客も君の書を愛翫おすとぞ

安田老山

墨水放舟避暑遊

柳陰螢火

映波浮

江風

自有清涼

一半潮

聲報早秋

君八世々函をもつて幕府へ仕ふ実ハ喜多村槐園翁の子ゟて其才非凡ありて安積艮齋の門ゟ入つて漢学を脩め又本草を学ぶ慶應年間勤を辞して蝦夷地ゟ至り病院並ゟ医学所を設立す幕府君ハ外國奉行とし若年寄格ゟ進ミ後佛國ゟ遊だれしが維新の後報知新聞社の長とおられぬ

籌謀天授世無倫
振起炎光四
百秋
昨日の
功臣今日
賊當時誰弔
淮陰矣

栗本鋤雲

君ハ始め甲子太郎といく後ヨ大隅守と称ー世々幕府ヨ儒を以く仕つくり中頃洋学ヲ修めーが慶應元年騎兵頭とある時ヨ君兵制ヲ洋式ヨ改ムる幕府ヲ解の際建言ある事數回後辞ーく再度仕へど朝野新聞社のをひヨ應ジて局長とあり月花を愛ーて向島元閑居せられぬ

成島柳北

霜雪飛時始出家
幾旬獄裏聽レ鐘
晨鴉歸来墨上春無レ跡
一逕薫風鼓子花

君八旧會津乃藩士なるが
天質書を好こと長崎に至
り清客を訪ひ筆法を
論ず明治元年支那上
海に航し同五年脩齋
廉節の四大字を書して
天覽に供す後宮内省より
御物の筆墨を賜ふ之を
依て両國中村樓にて雅
筵を設らき當日鷲龍の
二大字を書せり

佐瀬得所
清香深處
山烏宿
妖艶

瓊姿
隔薄帷

君ハ下總古河の藩士某の女なり幼稚よりよく畫を好まれど漢書よりよる支那の魏昭と贈答しく畫の奥旨を論じ山水を作るよ非凡よりて書もまた一家をなし皇国の鄭板橋と云つべし西京遊歴中坂地の豪商某千金を以て君の畫一葉を乞ひしとぞ

秋月明光滿碧空
窓前娯樂一杯中
三更未寐今
興寂々

虫聲
雜冷二
風一

奥原晴湖

君ハ東京の人ニして始め猪の助といふ字を子剛号を藍川とよぶ天質画ニ好ミ八才ニして樋口探玉齋の門ニ入り後吉澤雪庵ニ隨ひ支那風の画を学びまた番所調所の掌図局ニ入油繪の妙を知り英国人伯惑師ニ就キ其奥旨を極めしより其名を内外の人ニ知られたり

高橋由一　古琴齋

仙境も以目見乃あや

拙の花

君ハ豊後の国大分の人みて夙ニ東都ニ至り福澤諭吉の慶應義熟ニ入り此ニ螢雪の学を積ら專ら政治上の事を修む偶郵便報知新聞社ニ聘せられ仝社の編輯人と為りてより論説ニ記事ニ曰く激論卓議を載せられ其高名ある世人の知る所なり今改進主義を張り諸國ニ漫遊演説す

藤田茂吉

春光滿野柳

生煙雨後崖

低

筑後川想起

墨江舟裡趣

絃歌聲湧

落花邊

君ハ長崎の人なり幼より
て文才ありて安政六年江戸
より遊蕃所調所に入り秋田
箕作の諸氏よりきて蘭書
を学び英佛の書に渉る明
治元年江湖新聞を編輯し
後に大蔵省に出仕し理事
官となりて米國に航し同四
年大使に隨行等書記官
に任じ後官を辞し東京日
々新聞の社長となり

福地源一郎
秋蘆抽白擁二
漁家大似漁
翁衰髪華昨
夜
扁舟
月明裡
灣々看雪
不看花

宮八品邦家親王の三子く
して弘化三年正月十六日
を以て誕辰る仁孝天皇の
御養子とおる安政五年出
家まし〳〵仁和寺の宮と稱
す慶應三年十二月御還俗あ
りて議定職ニ任ど四年正
月軍事總裁とおられ明治
三年英國ヨ航し海軍ヲ従
事三年ニして帰朝し佐賀の
乱ヲも鎮撫の譽高し

二品東伏見嘉彰親王
実ハ代ゝ茂丸
如〳〵
かゝら
ゆんや
事ゟつ
たゝら
ゝりつ